

炭鉱企業におけるスポーツの展開(II) : 北海道炭 礦汽船株式会社の事例

著者	畠山 孝子
雑誌名	浅井学園大学短期大学部研究紀要
巻	44
ページ	1-12
発行年	2006-03-24
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00000765/

炭鉱企業におけるスポーツの展開（Ⅱ）

——北海道炭礦汽船株式会社の事例——

Early History of Sports in Japanese Colliery Companies（Ⅱ）

——The History of Hokkaido Colliery and Steamship Company——

畠 山 孝 子

Takako HATAKEYAMA

I 研究目的

1900年代北海道は炭鉱産業の一大中心地であった。本研究で事例とする北海道炭礦汽船株式会社（以下北炭と略す）は1889年設立、北海道開発と共に発展を遂げた、我国屈指の炭鉱企業である。北炭は早くから（1914年頃）企業内にスポーツを奨励し、多くのスポーツ活動が盛んに行われていた。

本研究では、北炭のスポーツ活動の実態を、北炭の歴史的推移に照らして明らかにする。ひとつの企業で、およそ一世紀にわたり実施された、職場内スポーツを取り上げ、炭鉱地域の特異な地域性の中で育まれた、スポーツ活動の意義および企業スポーツの果たした役割を検討したい。

北炭のスポーツ活動の導入期と戦前の展開については、北炭社内機関誌『社友』及び『炭光』並びに北炭年史等の企業内資料を基に調査を進め、次のことが明らかとなった。¹⁾

大正初期、北炭の経営再建のため、専務取締役役に就任した磯村豊太郎は、スポーツに強い関心を寄せる人物であった。磯村が北炭再建の方途として上げた、「労使共栄の原則を具現」²⁾、「福利施設の完備医事衛生の改善」³⁾のなかで、スポーツ施設を含んだ福利厚生施設の整備が進められ、スポーツ活動も奨励された。この頃から、重役カップに代表されるように北炭内のスポーツ活動は旺盛となった。

敗戦後、日本は民主主義国家として再建されるが、戦後の北炭は、復興景気と、貴重なエネルギー「黒いダイヤ」と言われた石炭の需要の増大で、企業としての再生を果たす。北炭内のスポーツ活動もまた、この景気に後押しされて、戦後の全盛期を迎えるのである。しかし、その後の石炭から石油へのエネルギー転換によって、炭鉱産業は斜陽産業といわれるようになり、衰退の道を辿る。戦後復興とその後の盛衰、北炭スポーツは激しい時代の流れの中で展開されるが、今回は、戦後再刊された北炭機関誌「炭光」を主な資料として、戦後復興期を中心に、そこで展開されたスポーツ活動を明らかにしたい。

Ⅱ 北炭社内報の特徴

北炭発行の社内機関誌では『社友』と『炭光』を上げることができる。『社友』は北炭職員層向けに1923年（大正12年）創刊，1944年（昭和19年）まで発行された社内報である。『炭光』は1928年（昭和3年）発行，戦時中一時休刊後，1950年（昭和25年）から1978年（昭和53年）まで発刊された機関誌である。戦前の社内報は，社員向けの『社友』，鉱員向けの『炭光』と，その配布先は区別されていた。北炭七十年史稿本の機関紙の項には「労務者の思想，教養の向上を目的として，昭和三年九月社内機関紙として『炭光』を発行した。」⁴¹⁾とある。戦時期の中断を経て，戦後の『炭光』は従業員全体を対象に再刊され，戦前の掲載記事の思想強化的傾向は一掃される。

本研究では，戦後，北炭の社内報として一本化された，『炭光』に掲載されたスポーツ記事を中心に調査を進める。その他，北炭史料は，1939年（昭和14年）発行の『北炭五十年史』および1958年（昭和33年）発行の『北炭七十年史』を使用し，それぞれの稿本（三井文庫所蔵）も適宜参照した。『炭光』は夕張市石炭博物館所蔵である。『炭光』の発刊の詳細は注に示した。^{注1)}

なお，北炭関係者への聞き取りも随時行った。

Ⅲ 戦後復興期を中心とした北炭のスポーツ

1. 北炭の歴史－戦後編－

大正期，昭和初期は軍需景気の中，日本を支えるエネルギー石炭として，炭鉱は著しい発展をとげた。1944年（昭和19年），北炭は軍事会社に指定され，国の増産指令（国策）を受け，切羽を増設し，採炭を一層推し進める。その影には，外国人強制連行，強制労働があった。

1946年（昭和21年）からの北炭の動向は，表1にまとめて示した。敗戦時，崩壊状態であった炭鉱は，その後，復興景気と，石炭の需要の増大で，全盛期を迎える。北炭の城下町夕張は，当時24の炭鉱を有し「炭都」と呼ばれた。

1955年（昭和30年）代に入り国内エネルギー需要が石炭から石油へ変わる中，1960年（昭和35年），夕張二鉱では42名が死亡するガス爆発事故が発生。北炭はこれを契機に本格的な合理化に着手した。1962年（昭和37年）には石油が自由化となり，石炭に対し国は出炭制限を行なう。スクラップ・アンド・ビルド政策により，炭鉱界は大きく揺れ動く。北炭は炭鉱の合理化を進める一方で，同年三井観光開発を設立する等で会社存続の対応を図る。当時の社長，萩原吉太郎は，政府からの援助を引き出す等，石炭業界は手厚い保護政策を受ける。

しかし，石炭産業の斜陽は進み，北炭は益々の合理化を図ることになる。北炭は経営危機に落ち，1973年（昭和48年）以降，1975年（昭和50年）平和鉱，1980年（昭和55年）夕張二鉱，清水沢鉱と閉山が相次ぐ。

1970年（昭和45年）最後の生き残りをかけて，夕張新鉱開発に乗り出す。1973年（昭和48年）

表1 北炭関連年表〔戦後編〕(1946年(昭和21年)～1995年(平成7年))

年 代	出 来 事
1946年(昭和21年)	北炭系十五山労働組合協議会結成
1947年(昭和22年)	取締役会長島田勝之助以下三取締役退任 職員、準職員、雇員、定夫制度廃止、雇員以上を社員と呼称
1948年(昭和23年)	社員就業規定制定
1949年(昭和24年)	各鉱業所鉱員就業規定制定
1951年(昭和26年)	社員希望退職募集(115名解雇)
1952年(昭和27年)	島田勝之助、取締役会長に就任 賃上要求炭労指令により全山無期限スト
1953年(昭和28年)	夕張工業高等学校を夕張市に移管 鉱員希望退職(4004名解雇)、社員希望退職(課長以下51名、係長以下496名)穂別鉱、登川鉱廃止
1954年(昭和29年)	平和第一鉱、第2鉱設置、角田鉱廃止、北海道ガス科学株式会社設立 天皇、皇后、夕張鉱業所へ行幸啓
1955年(昭和30年)	取締役社長制制定、萩原吉太郎、取締役社長に就任
1956年(昭和31年)	七十年史編纂室開設
1957年(昭和32年)	幾春別鉱廃止
1958年(昭和33年)	札幌テレビ放送株式会社設立 皇太子、夕張鉱業所へ行啓
1960年(昭和35年)	夕張二鉱、ガス爆発事故発生42名が死亡
1962年(昭和37年)	石油自由化、萩原社長、合理化案提示、スクラップ・アンド・ビルド政策施行
1965年(昭和40年)	石炭企業大手七社に、国は出炭目標提示
1969年(昭和44年)	三年間長期事業計画、ヤマを守る運動展開
1970年(昭和45年)	夕張新炭鉱計画着手
1972年(昭和47年)	開発銀行より4億円融資決定、
1975年(昭和50年)	平和炭鉱閉山
1977年(昭和52年)	夕張新炭鉱操業開始
1981年(昭和56年)	夕張新炭鉱、ガス突出事故発生、犠牲者93名、北炭夕張炭鉱会社更正法適用申請
1995年(平成7年)	北炭東京地裁に会社更生法の適用を申請、事実上の倒産

1958年(昭和33年)までは、七十年史編纂委員会編『北海道炭礦汽船株式会社七十年史』北海道炭礦汽船株式会社、1958年(昭和33年)より抜粋

のオイルショック後、国は石炭見直しを行なう。1975年(昭和50年)、北炭夕張新炭鉱は日本一の良質炭を採炭する北炭の最新鋭炭鉱として操業を開始する。しかし、支出炭確保を急ぐあまり、保安軽視が言われる中、開坑当初から鉱内火災に見舞われる。

1981年(昭和56年)10月、新鉱はガス突出事故により93名の犠牲者を出す。同年12月、北炭夕張新炭鉱は札幌地裁に会社更生法の適用を申請、事実上倒産する。翌年7月、政府事故調査委員会は「事故原因は不十分なガス抜きだった」と人災説を報告⁵⁾ 事故後、政府、三井グループは資金援助拒否、1982年(昭和57年)9月従業員は全員解雇となる。⁶⁾

1995年(平成7年)2月、北炭は東京地裁に会社更生法の適用を申請し、事実上倒産する。⁷⁾

2. 戦後の北炭の制動と『炭光』の再刊

『炭光』は、1950年(昭和25年)4月20日、北炭関係者の期待を集めて再刊される。当時の記事からは、戦後の北炭の制動と、復刊への期待が読み取れる。

終戦後の混乱、民主化の流れの中、北炭は重役総退陣を進め、機構の改革等で敗戦後の建直しを図る。「極度の労働攻勢に対する経営陣の反省と当社自立経営発端の年である。」⁸⁾と『炭光』に記されるように、1945年（昭和20年）には平和鉱に北炭初の労働組合が発足している。この動きに同調して、各鉱業所には次々と労働組合が設立される。北炭七十年史は「石炭鉱業における労働組合の組織活動は、出足が早かっただけに争議の性急激烈性は他にみられぬ特徴的なものがあった。」⁹⁾と記す。炭鉱社会がその歴史の中で築いた特殊な階層・階級化社会の歪が、敗戦を契機として、急激な労働改革、民主化の嵐を生んだと考えられる。

当時のこのような経過から、復刊時の記事には、北炭職員組合連合会会長の「地下労働者への親しみや、真の理解は、前途遼遠である。『炭光』も、この使命を果たすのには、まず親しまれ、懐かしまれることを切望する。炭鉱で生活するわれわれの飾らないまの姿が、広く世人に紹介されれば、それだけ、炭鉱に対する一般の理解も深まるだろう。」¹⁰⁾との言葉を載せている。また、北炭職員組合連合会委員長は「『炭光』が、炭鉱を愛し、炭鉱に生きる人々の生活感情に結びつき、職場と家庭、労働と生活の紐帯とし、特に、文化的に恵まれざる環境にある点に留意して、働く人々のよき友となれかしと要望して、『炭光』の再出発を祝福することとする。」⁸⁾と挨拶している。後の炭光300号機記念特集号の中で常任監査役は「『炭光』再刊第1号が発刊された時は、われわれ労務に携わっていた者は一道の光明がさしたように喜んだものでした。」¹¹⁾と復刊当時を振り返っている。このように、『炭光』の復刊は、北炭の戦後復興のひとつの象徴であったといえる。

また、敗戦と同時に北炭は外国人労働者の収拾と、1945年（昭和20年）、平和、新夕張、空知各鉱の労働組合結成を始め、組合クーデター、生産管理式争議、職員組合、労働組合の共同闘争を経て、労務行政、管理体制の根本的な変革を実施するに至る。

同時期、福利厚生の実施も図られた。『北炭七十年史』は、「戦後、社会的、経済的諸条件の変革とともに、福利厚生の施設そのものが労働条件化される傾向」を特異な時代相と指摘した後、「当社は一貫して生活文化の向上と労働力の再生産をはかるため、福利厚生の実施に意を注ぎ今日におよんでいる」¹²⁾と記している。戦前は、従業員の地域定住と、生産性の向上のための福利厚生施設の充実が、北炭にとって重要な労務管理手段であったが、戦後は従業員側からの生活向上の要求の形で、福利厚生施設の整備が進められた。

さて、目を北炭のスポーツへと向けると、スポーツもまた、企業の急激な変革とは無関係であるはずがなく、その歩みを同じくするのである。

以下、『炭光』新聞掲載記事の中から当時の北炭スポーツの軌跡を追う。

3. 『炭光』のスポーツ記事

（1）掲載件数の年次推移

『炭光』のスポーツ記事の掲載件数を、年次ごとの推移で図1に示した。スポーツの記事は再刊年が最も多く118件であった。以後徐々に下降する。1963年（昭和38年）以降、その減少

は著しい。この時期の北炭の経営状況がこの減少の背景にあるのは言うまでもない。この年国は石炭政策を大きく転換する。すなわち、優良炭鉱に生産を集約するスクラップ・アンド・ビルド政策の施行である。これにより多くの炭鉱は閉山に追い込まれる。北炭も例外ではない。1963年年頭の挨拶で萩原社長は「当社にとって重要な年」とこの年を位置づけ、「社長として光輝ある北炭を自立安定させるため、（略）最後の全責任を一身に負って再建の難事を強行する覚悟であります。」¹³⁾と述べている。北炭の危機的状況が理解できる。

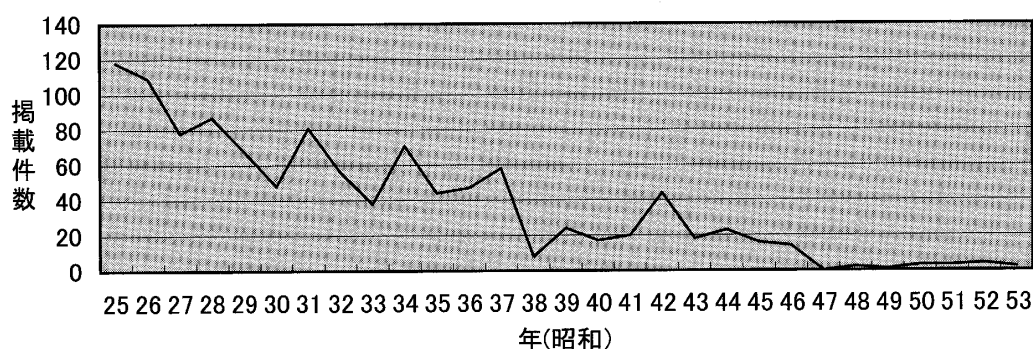


図1 「炭光」掲載のスポーツ記事－掲載総数の年次推移－

(2) スポーツ種目の比較

『炭光』が扱ったスポーツは多岐に及ぶ。載せられたスポーツ記事については、まとめて表2に示した。掲載総数は1103件、掲載されたスポーツの種目は、運動会、体育施設、体育祭等を含めて52種であった。図2には各スポーツ種目の掲載の割合を示した。最も多く扱われたスポーツは野球で全体の24%を占めていた。次いで、柔道の10%、運動会8%、スキー7%、庭球（現在のソフトテニス）6%の順であった。

(3) スポーツ記事からみた北炭スポーツ

①スポーツ関連の座談会記事から

1950年（昭和25年）9月1日には「やまのスポーツを語る座談会」¹⁴⁾が掲載される。この記事から、当時のスポーツ事情を読み取ることができる。労務部長は挨拶の中で「私たち日本人にとって敗戦も決して無駄であったわけではなく、幸いそこに残されているのは、明朗な右も左もないスポーツのフェアプレーの精神による平和で明朗な日本の建設の責任であります。（略）本日は、全山にスポーツ熱の盛んなこの機に乗じ、皆様のご抱負なり、ご苦勞なり、快心なりの発刺としたお話を承り、（略）」¹⁵⁾と述べている。終戦後、北炭の各鉱にスポーツが復活し、5年後の1950年には、「全山にスポーツ熱の盛ん」となった様子が理解できる。敗戦の混乱期に北炭の人々が、スポーツによりどこを求めたのは、戦前のスポーツ活動が基盤となっていることが想像できる。企業側は労務管理の手段としてスポーツを奨励した¹⁵⁾が、スポーツが実施者の主体的な欲求に突き動かされて行なわれたものであったが故に、終戦の混乱の中、

表2 「炭光」掲載のスポーツ記事－種目別掲載件数一覧－

No	種目	総数	No	種目	総数	No	種目	総数
1	野球	265	19	ダンス	10	37	射撃	1
2	柔道	107	20	硬式庭球	7	38	撓競技	1
3	運動会	87	21	スケート	7	39	体育大会	1
4	スキー	75	22	遠足	6	40	山登り	1
5	庭球	68	23	ラジオ体操	5	41	体育行事	1
6	相撲	67	24	空手	4	42	レクリエーション	1
7	排球	57	25	バレエ	4	43	プロレス	1
8	陸上	53	26	ハイキング	4	44	スキー登山	1
9	卓球	51	27	海水浴	4	45	アイスホッケー	1
10	剣道	36	28	ソフトボール	4	46	そり滑り	1
11	水泳	27	29	レスリング	3	47	スポーツ	1
12	弓道	20	30	リフティング	3	48	ゴルフ	1
13	羽球	17	31	ボウリング	3	49	舞踊	1
14	マラソン	14	32	蹴球	2	50	野遊び	1
15	施設(体育)	14	33	体育祭	2	51	居合	1
16	籠球	12	34	駅伝	2	52	競馬	1
17	ドッチボール	12	35	カーニバル	2		その他	21
18	ラグビー	10	36	体操	2			

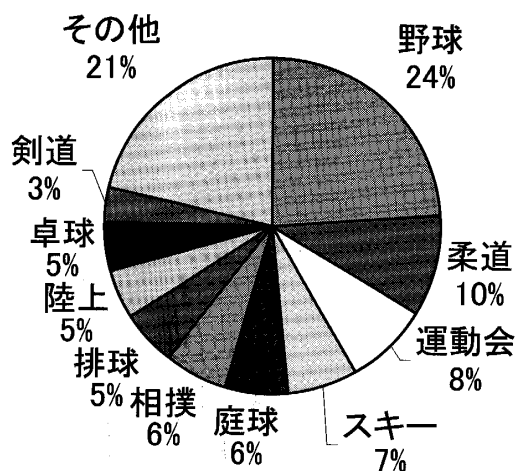


図1 「炭光」掲載のスポーツ記事－種目間比較－

自主的・自発的な行動として湧き起こった動きであると考えることができる。このスポーツ活動を支えた要因は石炭産業の復興景気、石炭需要の増大であるが、戦前の北炭のスポーツ施設・設備の存在もまた見逃すことができない。戦争によって荒廃していたにせよ、各競技の多くの施設は身近に残っていたことが、スポーツ実施を可能にしたと想像できるのである。

終戦直後、日本は、1945年（昭和20年）7月に廃止された体育局を9月に復活し、翌年には、社会体育を所管する振興課を体育局に設置し、「社会における体育運動の普及に関すること」の他五つの所管項目に則ったスポーツ行政をスタートさせている。¹⁶⁾

『戦後スポーツ体制の確立』の中で内海は「スポーツを通して育成されるスポーツマンシッ

ブを基盤としての民主主義の形成は、報告書^{注2)}の中であまりスペースを与えられてはいない社会体育にも大きな影響をもたらした。」また「戦後（スポーツ行政）改革の一つの大きな点は、勤労者のスポーツが重視されたことである。労働組合体育大会にみるように、その後労働省も推進母体として参加する。」¹⁷⁾と述べている。このような国のスポーツ政策と北炭のスポーツ復興は一致をみるのである。

大正初期に導入された北炭のスポーツ活動は、その時代の人々によって、脈々と受け継がれ、敗戦を経て、北炭の民主化が進むなかで、労使の枠を越えて新しい企業スポーツの姿が形成されていった。スポーツの「明朗な右も左もないスポーツのフェアプレーの精神」は、「平和で明朗な日本の建設」のため、機能することが期待された。当時の労務部長の発言からは、企業スポーツに寄せる並々ならぬ期待の大きさを読み取ることができる。

1952年（昭和27年）9月15日記載の平和鉱の座談会「職場スポーツを語る」¹⁸⁾からは、平和鉱業所におけるスポーツ部の復活を知ることができる。それによると、陸上は1948年（昭和23年）。野球部は1949年（昭和24年）である。また、バレーボール関係者は、海軍に入って、はじめてバレーを知ったと言い、軍隊のお陰でバレー部は1948年（昭和23年）に設けたとある。

今後の抱負については、「私たちはスポーツで山を明るくしようと思ってやっています。」と語り、会社側もまた「健やかで明るい『北炭の気風』を、単にスポーツの面に限らず全ての面に、皆さんがたスポーツマンが中心となって、スポーツを通じて育てあげて貰いたいと思います。」とスポーツ活動への期待をのぞかせる。

②炭鉱企業特有のスポーツ活動

この他にも『炭光』には、各鉱ともスポーツ特集やスポーツ座談会が多く載せられているが、それらの記事からは、炭鉱職場独特のスポーツ事情がうかがえる。

当時の練習の実態について、野球や柔道の練習は終業後で、部員は番割^{注3)}の変更などをしている。仕事の能率に及ぼす影響については次ぎのように記されている。「スコップでつかれて出てきても、柔道着をつけると、水でもかぶったようなすっきりした気持ちになりますからね」¹⁹⁾このように炭鉱企業特有の就業形態の中で実施された、スポーツの姿をみることができる。

戦前の北炭スポーツでは、思想善導、労務管理の一策として、スポーツを位置づける傾向を認めたが、終戦後は、スポーツに対して労使が一体となつての「明るい山」づくり、スポーツ関係者が中心となって「北炭の気質」を育て上げることを期待している。

1951年（昭和26年）7月5日掲載の「私の提言、炭鉱に盛り上げたいスポーツ熱」²⁰⁾の中で新幌内鉱、A氏は次のように提言している。

炭鉱におけるスポーツは戦前に比較し多種目にわたってとり入れられ、実施されているが、これは、スポーツの本質と価値が理解され認識されてきたことの証左であろう。

炭鉱は地理的環境において恵まれず、また、比較的文化的施設と娯楽機関に乏しい状況にあり、且つ坑内作業そのものに特殊性を有している。

このような環境において、炭鉱のスポーツ、勤労者のスポーツのあり方がますます重要となり、これら発展にはいっそうの努力が必要とされてくる。

（略）勤労者のスポーツは単に身体の外側からのみでなく、人間全体の立場からも考えなければならない。かように思考する時、炭鉱のスポーツが何故に必要であり重要であるかがこの一端でも伺い知ることができる。

（略）そこにスポーツの民主化、大衆性があり、一般的支持が生まれ、好きな者同志が集まって楽しむ会を作り上げるところに、スポーツの団体性の眞の姿が生まれるわけである。万人に好かれ、特に子供や青少年に同好者が多いのは、これが理由によるものである。この点から、炭鉱の老若男女がスポーツマンの一員に参加することは誠に容易であり、ぜひ一人でも多くスポーツに参加することを希うのである。

近年、全道工場鉱山、または全国勤労者の競技大会が開催されているが、大会を通じて、勤労大衆のスポーツ熱を普及する上において大きな意義を持つものである。

私たちは、スポーツの本質と価値をよりよく理解し認識して、われわれの生活設計の中に大いにスポーツをとり入れ、健康と人間性を高め、明るい清らかな、そして住み良い炭鉱を建設するために、ますますスポーツの輝かしい発展を期している次第である。

スポーツ活動が一般的に、人や地域に果たす役割をまとめた後に、炭鉱という特殊な仕事環境において、スポーツは単なる娯楽の域を越えて、炭鉱地域には必要不可欠なものとして存在すると、炭鉱企業内スポーツを位置付けている。

敗戦後、北炭は労働組合の共同闘争を経て、労務行政、管理体制の根本的な変革を実施するが、これら一連の民主化の流れは、戦前のスポーツを労務管理の一策と位置付けた企業主導型のスポーツから、戦後復興期には、労働者主体、スポーツ実施者を主体とした実施者主導型のスポーツ活動へと、そして、労使一体型の北炭特有の企業スポーツへと転換が図られたのである。

戦後復興景気と石炭需要の伸びに後押しされて、1947年（昭和22年）頃から、国策、基幹産業として炭鉱は好景気を向かえる。北炭の経営上昇気流と歩調を合せ、北炭のスポーツもまた戦後の全盛期を迎える。

（４）終戦当時の北炭スポーツ（テニス）^{註4)}－Yさんの聞き取りから－

①Yさんの略歴

Yさんは、北炭のテニスコートが点在していた炭鉱地域に育つ。この地域は昭和初期からテニスが盛んであった。旧制中学校2年で終戦を迎える。終戦直後このコートは荒廃していたが、当時の北炭職員の声かけによる、多くの人の労作で復興したという。昭和22年、新制高校時、

終戦後の何もすることが無い中、近くのコートでラケットを握る。高校を卒業後、北炭に就職する。テニスをするには恵まれた環境で仕事をした。当時は企業内の対抗戦を始め、工場と鉱山関係の40社以上の会社が参加する大会が盛んで、代表選手として出場した。昭和37年企業の合理化により、配置転換となる。

②戦後復興期のテニス

Yさんは、夕張の戦後復興当時のことを、次のように語った。

ラケットを持ったのですね、22年の秋。16歳になるくらいですね。夕張って所はうなぎの寝床のような所に（テニスコートが）10何面も散らばってあるんですよ。それで、昭和の一桁の頃が一番盛んだったんでしょうけど、戦時中、物も無ければそういう若い人たちもいなくなったこともありましたよね。テニスコートは食糧難のために、家庭菜園みたいになったわけで……。そんなようなことがありましてから、テニスコートみたいなものはあったんですけど、それまでの間ラケットを握るって事は。ただ、終戦後、何もやる事がございせんよね。それで、私は旧制の中学へ入りましたからね。22年というと、確か中学の3年か4年生くらいの時だったと思いますけど、中古のねずみに食われたようなラケットを持ったのが一番最初なんです。（略）（ラケットを）使い回ししながらやって、中学校にはテニスボールなんていうのは配給になりませんでしたから、会社（北炭）の方のそう言った用具を全部借り受けとったというか、独占してやれるわけですからそれはほんと楽しかったですよ。

北炭初のテニスコートは大正6年に鹿の谷に設置されている。テニスはその後普及し、大正末期から太平洋戦争前は、北炭重役のカップ戦が行なわれ、夕張の澤にテニス旺盛の時代を築いた。²⁰⁾ Yさんが生まれた年、鹿の谷では、盛んにテニスが行なわれていたのである。Yさんが始めてテニスをしたのは住初地区のコートである。大正12年設置されているので、戦前も使用されていたと考えられるが、Yさんの話しには、敗戦の影響を色濃く残す荒れ果てたテニスコートとしての印象が残るのみである。

北炭が企業内スポーツとして奨励したテニスであったが、企業の枠を超えて、敗戦で荒廃した地域の青少年に健全な遊びと、その場所を提供した。Yさんは「コートに行くと仲間がいる。一緒に遊べる」のでテニスを始めたと言う。コートへ行くと北炭の人が教えてくれたり、道具を貸してくれたりした。Yさんの話を通して、北炭のスポーツの地域への広がりが見えてくるのである。この聞き取りからは、荒廃著しい敗戦直後の炭鉱地域にも、そこに芽吹く、新しいスポーツの姿をみることができる。

Ⅳ ま と め

戦後民主化の嵐は、炭鉱社会を大きく変容させた。敗戦後の混乱の中、北炭には早い時期から労働組合が組織されていく。1950年（昭和25年）、北炭の民主化のひとつの象徴である配布先が一本化された北炭機関紙『炭光』が復刊する。『炭光』は復刊当初スポーツ記事を多く扱っているが、北炭の経営合理化と歩調を合わせるように、その扱いは減少する。『炭光』のスポーツ記事からは、戦後復興期の北炭のスポーツ活動の様子が見えてくる。戦後は、労使一体となつてのスポーツ活動が展開された。

戦前の北炭のスポーツは、企業主導型であつたのに対して、戦後の展開は、企業がスポーツ活動を支援する、企業支援型のスポーツに転換が図られていった。

聞き取りからは、戦後の荒廃の中にも、北炭スポーツ関係者の地域貢献によって、地域の人々にも、スポーツが蘇る様子を見ることができた。

（付記）

この研究は、平成17年度浅井学園大学短期大学部特別研究費の助成を受け進められた。

（謝辞）

この研究を進めるに当たっては、夕張石炭の歴史村郷愁の丘ミュージアムセンター長青木隆夫氏、北海道大学大学院教育学研究科助教授大沼義彦氏には、貴重なご助言、ご指導を頂きました。ここに、深く感謝の意を表したいと思います。

注

注1）本研究では用いた『炭光』の発刊は月2回である。

なお、1950年は第1号から第12号を発刊以下次の通りである。1951年（第13号～第35号）1952年（第36号～第55号）1953年（第56号～第75号）1954年（第76号～第99号）1955年（第100号～第123号）1956年（第124号～第147号）1957年（第148号～第170号）1958年（第171号～第189号）1959年（第190号～第211号）1960年（第212号～第232号）1961年（新年増刊号を含み第235号～第253号）1962年（第254号～第275号）1963年（第276号～第295号）1964年（第296号～第313号）1965年（第314号～第333号）1966年（第334号～第352号）1967年（第353号～第371号）1968年（第372号～第389号）1969年（第390号～第407号）1970年（第408号～第425号）1971年（第426号～第446号）1972年（第447号～第465号）1973年（第466号～第479号）1974年（第480号～第496号）1975年（第497号～第511号）1976年（第512号～第527号）1977年（第528号～第544号）1978年（第545号～第554号）

注2）1946年4月7日には発表された第一次米国教育使節団報告書

注3）北海道大学図書館北方資料館蔵、北海道炭礦汽船株式会社寄贈資料より引用の番割につ

いての規程は以下の通りである。

労働協約書1964年（昭和39年）9月15日

1964年（昭和39年）度規定関係

原則として次の通り

	普通勤務者	交替勤務者		
		一番方	二番方	三番方
始業時刻	午前 8 時	午前 8 時	午後 4 時	午前 0 時
就業時刻	午後 4 時	午後 4 時	午前 0 時	午前 8 時
休憩時間	正午より 1 時間	正午より 1 時間	内, 1 時間	内, 1 時間

前項の就業時間は、業務の都合又は勤務地の慣習若しくは季節により、組合と協議の上、2 時間以内の繰上げ又は繰下げを行うことができる。

1964年（昭和39年）9月15日

注 4）ここで行われたテニスは軟式テニス、今のソフトテニスである。

参考・引用文献

- 1) 畠山孝子：「炭鉱企業におけるスポーツの展開（そのⅠ 導入期）—北海道炭礦汽船株式会社事例—」．北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要．第43号．2005年．pp.7-20
- 2) 北海道炭礦汽船株式会社：北海道炭礦汽船株式会社五十年史，1939，序 p.2
- 3) 同上書，序 p.2
- 4) 七十年史勤労編下巻の一（自昭和13至同20）第一次稿本：三井文庫所蔵，p.289
- 5) 増谷栄一：『昭和史北炭夕張炭鉱の悲劇』，彩流社，1996，p.223
- 6) 同上書，p.224
- 7) 同上書，p.11
- 8) 『炭光』：1950年（昭和25年）4月20日
- 9) 七十年史編纂委員会編『七十年史』北海道炭礦汽船株式会社資料，1958，p.275
- 10) 『炭光』：1950年（昭和25年）4月20日
- 11) 『炭光』：1964年（昭和39年）4月5日
- 12) 同上書，p.294
- 13) 『炭光』：1963年（昭和38年）1月1日
- 14) 『炭光』：1950年（昭和25年）9月1日
- 15) 前掲書，畠山孝子，2002
- 16) 戦後スポーツ体制の確立，内海和雄，不昧堂出版，1993，pp. 28～29
- 17) 同上書 pp.29～30
- 18) 『炭光』：1952年（昭和27年）9月15日
- 19) 同上書，1950年（昭和25年）9月1日

- 20) 同上書，1951年（昭和26年）7月5日発行
- 21) 畠山孝子：「炭鉱企業におけるソフトテニスの導入と戦前の展開―北海道炭礦汽船株式会社の事例―」．北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要．第41号．2002，pp.25-40